

## 第4回「ヒヤリハットや気づきが出てこない理由を考える」

NPO 法人保育の安全研究・教育センター代表理事 掛札 逸美

## ●「さあ、みんなでヒヤリハットを出そう！」…、ところが？

さて、付箋法にしてみました。「気づきやヒヤリハットは、出した者勝ちだよ。みんなでどんどん出そう」と、園長が全職員に話しました。ところが、フタをあけてみるとたいして出てこない…。

人間の意識や行動が簡単に変わるなら、安全や健康の分野に心理学者は要りません。そもそも、「頭でわかっていても」、そう簡単には変わらないのが人間の行動。そして、これまで気づきやヒヤリハットが出てこなかったのですから、それを変えるのは容易ではないのです。「安全文化」を園の中で、法人の中で作っていくには時間がかかるという点を、まず頭の中に入れておいてください。

では、集まった付箋を見ながら、日付ごと、クラスごとに出てきた気づきやヒヤリハットの件数を表に書き入れていきましょう。この時…、

- 1) かみつき、ひっかき、ケンカ（子どもと子ども間の関わりの事象）、と
- 2) その他の気づき、ヒヤリハット、を分けます。

かみつきやひっかきには子どもの発達段階もありますし、「今、よくかみついている子」が登園しているかどうかによっても変わります。子どもたちの行動を先読みしてかみつきやひっかきをうまく止められる先生が、その日、クラスにいるかいないかでも件数は変わるでしょう。かみつき、ひっかき、ケンカの類には、こうした要因が強く関わってくるため、他の気づきやヒヤリハットとは別にしたほうがわかりやすく、対策も立てやすくなります。

（報告件数の記入例：「気づきやヒヤリハット」と「かみつき、ひっかき、ケンカ等」を分けてある）

	ひよこ組(0歳)		つばめ組(1歳)		ペンギン組(2歳)	
	ヒヤリ等	かみつき等	ヒヤリ等	かみつき等	ヒヤリ等	トラブル等
1月15日(月)	4	0	0	6	2	5
1月16日(火)	0	3	0	3	4	2
∥						
1月17日(金)	2	3	1	7	1	4

かみつき等よりも子ども同士のトラブルが増えるため

## ●「気づいていない」のか、「報告しない(できない)」のか

気づきやヒヤリハットの報告が多いクラス、少ないクラス、報告が多い日、少ない日などが見えてくるはずですが。報告の多い少ないはいくつかの要因に左右されます。

## 1) 気づいていない、気づけない

危なさやリスクについて知らなければ、気づきもヒヤリハットも起こりません。「1歳ぐらいになると、なんでも口を入れる」と知っていても、「球形のものは危ない」「誤嚥窒息は命にかかわる」と知らなかったら、合同の時間、床に落ちているビー玉にドキリとはしないでしょう。気づきやヒ

ヤリハットは、知識と経験をもとに身につけていくスキル(\*)のひとつです。日本の学校では(どんな学校でも)スキルを教えませんから、本人が積極的に身につけようとし、まわりもそれを支援しなければ、身につかないのです。

## 2) 「大丈夫」と思っている

「今、1歳さんはなんでも口に入れる時期」「球状のものは危ない」「誤嚥窒息は死亡するかも」とわかっている、「私が見守っているから大丈夫」「うちのクラスの子は言うことを聞く」と思っていたら、危なさを放置するでしょう。人間には強い楽観バイアス(\*\*)がありますから、ついつい「私たちは大丈夫」と思ってしまうがち。「お子さんの命を預かる仕事をしているのだから、命に関わりそうな危険については『きっと大丈夫』ではなく、『もしかしたら大変なことになるかも』と考えて報告しよう、共有しよう」と園長やリーダーが伝えていってください。

## 3) 「言いたくない」「言ってもしょうがない」

これまで保育園の中に、気づきやヒヤリハットの共有を妨げる雰囲気があった場合、付箋法にしても園長が呼びかけても、容易に報告が上がってくるようにはなりません。

たとえば、「それは、～先生が悪かったんでしょ」「～先生が見守っていれば防げたのに」と原因追及の態度でいたら、誰も何も報告しなくなり、自分が責められるとわかっている、わざわざ報告する人はいません。一方、気づきを報告しても「大丈夫よ」「今まで何も起きてないんだから平気」と返されたら、「そうか。大丈夫なんだ」と思ってしまうか、「大丈夫だとはとても思えないけど、言ってもしょうがないなら、もう言わない」になってしまいます。

この文化(空気)を変えるには、園長やリーダーが率先して「気づいてくれてありがとう」「言ってくれてありがとう」と言うことです。そして、「じゃあ、どうしようか」「考えてみようか」と伝えましょう。たとえ、今回はその保育士さんの行動に明らかな原因があったとしても、まずはこのように話を始めていろいろなことを話しながら、「先生は、こういうふうにしてみたらどうかな?」「他の先生たちは、自分だったらどうする?」と言うのです。こう話すことで、個人を責めることなく、「みんなの前で起こりうることなんだ」「みんなで取り組む必要があるんだ」という文化を作ることができます。

「気づいてくれてありがとう」「言ってくれてありがとう」、これは次の気づき、次の報告を促す上で不可欠な言葉です。そして、安全だけでなく保育に関するコミュニケーションを良くするための言葉でもあります。「ありがとう」と言われれば、「また気づこう」「また言おう」と思います。ただでさえ忙しい保育現場でヒヤリハットや気づきを報告し、共有することは簡単ではありません。「ありがとう」の言葉が、その難しさを乗り越えるひとつの鍵になります。

そこで今回は、安全におけるコミュニケーションの重要性について触れたいと思います。

\* スキルとは、知識や技術を「今、この場の状況」に合わせて使うことができる「応用力」を意味します。保育や安全に関する知識があっても、「今、この状況ではどうすればいい?」と考え、実際に行動できるようにならなければ、それはスキルになったとは言えません。

\*\* 楽観バイアス：人間には、さまざまなリスクについて「自分(たち)」と「自分(たち)以外」を比べて、自分(たち)の側のリスクを過小評価する「もの見方の歪み(認知バイアス)」があります。「そんな事故があったの?うちの園は大丈夫よ」と考えてしまうのは、楽観バイアスの作用です。